

德富蘆花 國木田獨步 島崎藤村
永井荷風 高村光太郎

日
漢
對
照
版

日本經典 美文選

孔瑤 等譯

中和出版
Otonari
中

目次

序 / i

自然と人生 徳富蘆花 / 001

自然與人生 徳富蘆花 / 001

武蔵野 国木田独歩 / 043

武蔵野 國木田獨歩 / 043

千曲川のスケッチ 島崎藤村 / 097

千曲川風情 島崎藤村 / 097

雪の日 永井荷風 / 147

雪日 永井荷風 / 147

山の四季 高村光太郎 / 173

山之四季 高村光太郎 / 173

序

「日漢對照有聲版」系列已出版的小說讀物深受歡迎，頗具口碑，故引入隨筆，旨在提供原汁原味、品質優良的散文佳作以饗讀者。

我們對作家與作品的遴選非常審慎，不但考慮了作家與作品的代表性和影響力，而且也希望給讀者帶來閱讀享受和審美愉悅的同時，還能給當今遭受西方文化衝擊的我們帶來些許啟發與思考。具體選取的作家作品如下：德富蘆花（1868—1927）的《自然與人生》（1900）、國木田獨步（1871—1908）的《武藏野》（1898）、島崎藤村（1872—1943）的《千曲川風情》（1912）、永井荷風（1879—1959）的《雪日》（1923—1948）、高村光太郎（1883—1956）的《山之四季》（1945—1952）。由於篇幅所限，其中《自然與人生》《千曲川風情》《山之四季》為節選。具體翻譯分別由孔瑤、郭倩、張穎慧、劉依哲、彭群林等五位譯者統一規範，獨立承擔，相互協作，共同完成。

以上五位文學大師均出生於日本明治年間，除了 1908 年因肺結核病逝的國木田獨步外，其他四位作家的文學創作生涯均跨越了明治、大正、昭和三個歷史時期。明治、大正時

期，是日本受到西方文明強烈衝擊、發生天翻地覆巨大變革的時期，也是日本文壇社團流派應運而生、文學思潮起伏遞嬗的時期，更是日本文壇有史以來作家最為活躍、創作最為繁盛、名篇佳作層出不窮的時期。五位大師適逢其會，在東西文明交融的過程中，積極擁抱西方文明，努力從歐美文學中汲取營養，並以自身堅實深厚的文學素養與漢學功底，迅速脫穎而出，嶄露頭角，在人才輩出、彬彬濟濟的日本近代文壇上確立了一席之地。

德富蘆花少年時受自由民權運動的熏陶，1885年皈依基督教，1907年去耶路撒冷朝聖，回國時專程去拜見托爾斯泰。之後，托爾斯泰的「和平思想」、歌德的「浪漫主義」、日本古典文學中的「物哀」「閒寂」等美學理念，對蘆花的創作產生了極大影響。蘆花的隨筆《自然與人生》充分展現了作者不同凡響的文學造詣，因兼具「東方寫意」和「西方寫實」的文學風格，被譽為日本近代隨筆文學的經典之作。

國木田獨步曾在東京專門學校（早稻田大學的前身）學習英語，信奉基督教，酷愛英國湖畔詩人華茲華斯及俄國作家屠格涅夫等人的作品，深受華茲華斯的「唯情論」和「返回自然說」的影響。獨步的隨筆《武藏野》既受到了西方「浪漫主義」文學思潮的影響，又有日本傳統美學理念「閒適」「風雅」投影其中。主觀情感與客觀事物交融的寫作手法，多重技巧的純熟運用，增強了語言的表現力與感染力，獨特的藝術風格成就了獨步隨筆的獨特美感。

島崎藤村14歲習得英語，20歲便為《女學雜誌》翻譯介

紹英國詩歌，1913 年為擺脫戀愛苦惱而奔赴法國。1935 年，島崎成為日本筆俱樂部的初代會長，1936 年代表日本參加布宜諾斯艾利斯的國際會談，其間參訪了美國和歐洲。豐富的人生經歷與海外閱歷，深厚的傳統文學造詣及漢學功底，成就了島崎的文學創作。1912 年島崎發表隨筆《千曲川風情》，運用寫生的手法，將千曲川一帶的自然風光與風土人情細膩生動地描摹出來，帶有強烈的「寫實主義」風格，與其前期的「浪漫主義」詩歌創作形成了鮮明對比。同時，這部作品也滲透着日本傳統審美意識的「恬淡」與「餘情」，清麗幽雅，意蘊無窮。

永井荷風曾遊學美國、法國，寫有《美國故事》《法國故事》，西方唯美主義對其影響的痕跡非常明顯。之後發表的《喝過紅茶之後》及《冷笑》，對當時日本明治社會表面盲目西化、內裏不改封建專制的「偽文明」之粗劣醜陋進行了冷嘲熱諷。《狐》《歡樂》等短篇小說集和《新歸國者日記》等文章，則給自然主義盛行的日本文壇吹進一股清新的唯美新風。荷風的《雪日》系列散文，將日本傳統的「江戶情趣」與西方的「唯美主義」相糅合，通過對花街柳巷、藝伎下町、自然風貌的描寫，展現了永井荷風的唯美主義文風。荷風博採眾長，將中國漢詩的「意境美」與西方唯美主義的幽暗頹廢之感觸融合到日本傳統的「物哀」「風雅」「閒寂」之中，完美地體現了獨特的藝術魅力。

高村光太郎曾赴美國、英國、法國留學，在留學巴黎時學習法國象徵派詩人魏爾蘭的詩，傾慕並研究了法國 19 世紀

雕塑家羅丹的雕刻。回日本後，他參加了唯美主義藝術運動，並發表唯美頹廢派風格的詩作。他的抒情詩帶有浪漫主義傾向，剛健的詩風與其所具有的雕刻家的素養不無關係。隨筆《山之四季》描寫春夏秋冬的四季變換、人與自然的交織交融、新知故舊的相知相愛。純真、質樸、清新。雖然高村光太郎是一位暢遊歐美、深受西方文學和自由主義思潮影響頗深的作家，但骨子裏滲透的審美感受與日本傳統的審美理念一脈相承，其藝術底色上浮現的依舊是日本傳統的審美意識。

上述五位大師有着極其相似的人生經歷，曾經一度醉心西方文明並深受其影響。然而，紫式部的《源氏物語》、清少納言的《枕草子》、吉田兼好的《徒然草》、鴨長明的《方丈記》以及俳諧大師松尾芭蕉等一代宗師的美學理念「物哀」「幽玄」「明快」「閒寂」「無常」「恬淡」「餘情」等，早已深入五位大師的骨髓，也就是說，日本傳統文化的基因已然決定了五位大師作品的氣質。所以，五位大師在接受西方文明的強烈衝擊之後，雖然也曾昏昏然，但最終還是迷途知返，不但完成了華麗的回歸與完美的傳承，並且汲取了西方文學的精華，在日本傳統隨筆文學韻致典雅的底色上，又增添了一抹別樣的色彩與異趣的情調。

梳理完作家作品，最後交代一下文本形式。我們採用了「中日對照」形式，即原文和譯文兩種文本同時呈現給讀者，並且，還對原文中的所有日文漢字「標註假名」，目的是「為日本文學愛好者提供閱讀方便」。雖然在翻譯過程中，深感「中日對照」的形式有些「自縛手腳」，「標註假名」也平添了

許多工作量，但五位譯者仍然嚴格遵循「以讀者為本」的宗旨，自始至終一絲不苟，力求準確流暢，儘可能地體現原作的風格與特點，盡其所能地提供高質量的譯文以饗讀者。儘管如此，深知失誤與紕漏仍在所難免，歡迎讀者朋友不吝賜教，在此誠摯感謝！

張予娜

2025 年 8 月

於湖南長沙



掃描 QR Code 即可免費獲取
《自然と人生》日文原文朗讀音頻

自然と人生

徳富蘆花

自然與人生

徳富蘆花

「選粹」



このごろ ふ じ あけぼの
此頃の富士の曙

このごろ ひと み このごろ ふ じ あけぼの
心あらん人に見せたきは此頃の富士の曙。
午前六時過ぎ ころ ず し はま た のぞ がんぜん すいじょう
午前六時過ぎ、試みに逗子の濱に立って望め。眼前には水蒸
きうず さがみなだ み なた はて すいへいせん そ くら
気渦まく相摸灘を見む。灘の果には、水平線に沿うてほの闇き
あいいろ み も そのほくたん おな あいいろ ふ じ み しょくんおそ
藍色を見む。若し其北端に同じ藍色の富士を見ずば、諸君恐ら
あしがら はこね い ず れんざん そのらんしよくいちまつ うち ひそ し
くは足柄、箱根、伊豆の連山の其藍色一抹の中に潜むを知ら
ざる可し。

うみ やま いま ねむ
海も山も未だ睡れるなり。
ただいままつ しょうび いろ ひかり ふ じ いただき さ ゆんづえ ばか
唯一抹、薔薇色の光あり。富士の巔を距る弓杖^①許りに
よこ たなび かん しの しばら た み しょくん その
して、横に棚引く。寒を忍びて、暫く立ちて見よ。諸君は其
ばらいろ ひかり いちびよういちびよう ふ じ いただき むか は くだ したた
薔薇色の光の、一秒々々富士の巔に向つて這ひ下るを認
べ じょう ごせき さんせき せき しこう すん
む可し。丈、五尺、三尺、尺、而してす。

ふ じ いまねむり さ
富士は今睡より醒めんとすなり。
いまさ み いただき ひがし いっかく ばらいろ
今醒めぬ。見よ、嶺の東の一角、薔薇色になりしを。

こ またた み いま ふ じ いただき こう か み
請ふ瞬かずして見よ。今富士の巔にかゝりし紅霞は、見
るが内に富士の 暁 闇を追ひ下ろし行くなり。一分、—— 二
ふ かた むね み てんべん た さんご ふ じ ももいろ
分、—— 肩—— 胸。見よ、天邊に立つ珊瑚の富士を。桃色に

① 弓杖：「弓丈」と同じ、弓の長さを指す。

此刻富士的黎明

想給有心人看看此刻富士的黎明。

清晨六時後，試着站在逗子的海濱眺望吧！眼前是水霧瀰漫的相模灣。海灣的盡頭，沿着水平線可望見一絲微暗的藍色。若未曾看到聳立在北端相同藍色的富士山的話，你或許還想不到足柄、箱根、伊豆的群山也都隱沒在這一抹幽藍之中呢！

海和山尚在沉睡。

唯有一抹薔薇色的霞光，在距富士之巔僅一弓之遙處左右橫斜着。忍着寒冷，再站着眺望一會兒吧！你會看到那抹薔薇色的光一秒一秒地朝着富士山巔向下移動。一丈、五尺、三尺、一尺，而至一寸。

富士山正從睡夢中醒來。

她已經蘇醒了。你瞧，山峰東邊的一角，已經染上了薔薇色。

請定睛凝望吧！眼看那橫掛在富士山巔的紅霞將拂曉的昏暗漸漸驅散。一分——兩分——肩膀——胸膛。看啊！那聳立在天邊的珊瑚般的富士山！雪白的肌膚洋溢着桃紅色的芬芳，整座山都晶瑩剔透起來了。

にお ゆき はだ やま す とお
 匂ふ雪の膚、山は透き徹らむとすなり。

ふ じ うすくない さ こ め した うつ こう か すで もつと
 富士は薄 紅 に醒めぬ。請ふ眼を下に移せ。紅霞は已に 最
 きた おおやま かしら は あしがら およ はこ ね うつ
 も北なる大山の頭にかゝりぬ。早や足柄に及びぬ。箱根に移
 りぬ。見よ、闇を追ひ行く 曙 の足の迅さを。紅追ひ藍奔りて、
 い ず れんざん すで ももいろ そ
 伊豆の連山、已に桃色に染まりぬ。

くれない あげぼの あし い ず さんみやく なんとん あまぎやま こ とき
 紅 なる 曙 の足、伊豆山脈 の南端天城山を越ゆる時は、
 こ め か ふ じ した のぞ むらさきにお え しま
 請ふ眼を回へして富士の下を望め。紫 匂ふ江の島のあたり
 こつぜん に さん きんはん ひらめ み
 に、忽然として二三の金帆の 閃 くを見む。

うみすで さ
 海已に醒めたるなり。

しよくん も う なおたす やが え しま むか こしごえ みさき
 諸君若し倦まずして猶 イ まば、頓て江の島に對ふ腰越の 岬
 かく さ み つい こつぼ みさき およ み さら た
 赫として醒むるを見む。次で小坪の 岬 に及ぶを見む。更に立
 しよくん かげ なが まえ お ころ いた さがみなだ すいじよう
 ちて、諸君が影の長く前に落つる頃に到らば、相摸灘の水 蒸
 き しょうや おさ かいこういつべき かがみ ごと み このとき め
 氣 漸く收まりて海光一碧、鏡の如くなるを見む。此時、眼を
 あ み ぐんざんこう あ そら らんおう のぼ きわ うす プ
 舉げて見よ。群山紅褪せて、空は卵黄より上りて極めて薄き普
 ル シ ア あ い はくせつ ふ じ たか せいくう よ み
 魯士亞藍色となり、白雪の富士高く晴空に倚るを見む。

こころ ひと み このごろ ふ じ あげぼの
 あゝ 心あらん人に見せたきは此頃の富士の 曙 。

富士山從薄紅色中醒來。請將你的視線向下移動。紅霞已經罩在了最北面的大山山頭，很快又到了足柄山，接着轉到了箱根山。你瞧，驅散黑夜的黎明的腳步是多麼快呀！紅光追逐，藍夜奔離，伊豆的群山已是桃色盡染。

當紅色曙光的腳步越過伊豆山脈南端的天城山時，請將視線移向富士山腳下吧！泛着紫色的江之島一帶，忽而可以看到兩點金帆閃爍。

大海已經蘇醒。

若能毫不疲倦地再佇立一會兒，不久你就會看到江之島對岸的腰越岬赫然蘇醒的樣子。接着是小坪岬。若再站一會兒，當你的身影長長地倒映在眼前的時候，相模灣的水霧漸散，海天一色，澄碧如鏡。此刻，請抬眼遠眺吧！群山褪下紅裝，天空由鵝黃轉為淡淡的普魯士藍，白雪皚皚的富士山聳立於晴空之中。

啊！真想給有心人看看此刻富士的黎明。

たい が
大河

し せんじょうにありいわく ゆくものかくのごときかな ちゆうやをおかず
子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜。

かわ たい にんげん かんじょう まこと このふたく どう は つく い
川に對する人間の感情は、實に此兩句に道破し盡されて居
る。詩人の千百言、終に夫子の此口頭語に及ばぬのである。

うみ まこと だい せい とき じ ぼ むね ごと ひと おこ
海は實に大、靜なる時は慈母の胸の如く、一たび怒れば
殆んど上帝の怒を想はしむる。併し「大江日夜流」の氣勢と
意味とは、また之を海に見る能はざるのである。

こころ あるたい が ほとり た おうおう かすい おと た
試みに或大河の濤に立つて、決々たる河水の、音も立てず、
靜かに、息まずに、流れ流れ流れて限りなく流るゝを見たまへ。
ゆくものかくのごときかな まこと おくまんまんねん むかし おくまんまんねん あと いた
「逝者如斯夫」實に億萬萬年の昔より億萬萬年の後に到るま
で、無限のスペースを流れ流れて限りなく流れ行く時の流を想
ふのである。あゝ、白帆が見えて来た、……前を過ぎ行く……過
ぎ行く……最早見えない。ローマ いわゆるだいていこく か す
たではないか。あゝ、笹の葉が流れて来る、ちらりとする、最早
見えない。アレキサンダル ナ ボ レ オン こ とおり かわれ
等は今何在哉。溶々として流るゝは唯河の水のみである。

えいえん に じ うみ むし たい が ほとり おも
永遠の二字は、海よりも寧ろ大河の濤にあつて思ふ。

大河

子在川上曰：「逝者如斯夫，不捨晝夜。」

人們面對江河的感覺，確實已被這兩句話所道破。詩人的千百言語，終不及孔夫子的一句口頭語。

大海在遼闊寧靜時的確如慈母的胸懷，一旦生氣又讓人聯想到上帝之怒。然而，「大江日夜流」的氣勢和意蘊，卻不是大海中所能看到的。

不妨試着站在一條大河的岸邊，看那泱泱河水，無聲無息，靜靜地無限流淌的情景吧！「逝者如斯夫」，你會想到時間的河流正如這般從億萬年之前到億萬年之後，流經無限時空，並永無止境。啊啊，眼前有白帆駛來了……駛過面前……越行越遠……望不到了。所謂的羅馬帝國不就是這樣流逝的嗎？啊啊，幾片竹葉飄來了，倏忽一閃又不見了。亞歷山大、拿破崙，莫不如是。啊啊，他們今何在哉？依舊溶溶然流淌的唯有這大河之水。

我想，站在大河之畔，要比站在大海之濱更能體會到「永遠」二字的含義。

利根の秋曉

あきじゅういちがつ しよじゆん と ね さ がん いきす い ところ と
 秋十一月の初旬、利根の左岸の息栖と云ふ所に泊まつ
 た。此處は利根の本流が、北利根北浦の末流と落合うて来る
 ので、川幅が闊く、對岸の小見川迄は小一里もあらう。宿は直
 ぐ水邊にあって、夜半に眼を醒すと、櫓の音が軋々枕頭に聞
 える。

あけがた お やど もの ま ね い そつ と あ
 黎明に起きて、宿の者は未だ寢て居るので、窃と戸を明け
 て、河邊に出ると、其處に薪が積むである。霜を拂って、腰
 かけた。まだほの闇い、空も河面も茫として鉛色であった。
 す うら ほう くら こ や なか とり いさ あかつき つ
 直ぐ裏の方の闇い小屋の中で、鶏が勇ましく曉を告げると、
 餘程經て川向ふの小見川の方から、さも微かな鶏の音が聞え
 た。大河を隔てゝ呼びかはす此鶏聲は、實に宜い、チェルシ
 アの賢とコンコルドの哲とは、實に斯くの如く大西洋を隔てゝ
 よ 呼びかはしたのであらう。抑も亦た自分が眼には、曉は此
 の兩岸の鶏聲の間から川面に湧き上つて来る様に思はれた。
 しばら お み がわ ほう そら ばらいろ き
 暫くすると、小見川の方の空がぼうつと薔薇色になつて来た。
 み かわづら うすくれない なが すいじょう き み
 と見ると、川面も薄紅を流して、ほやり／＼水蒸気が見え
 て来た。實に迅い、瞬きをする間もないのである。夜は川下
 ほう なが あけぼの ひかり あたり み いる とり おおな き
 の方へ流れて、曙の光は四邊に満ちて居る。鶏は猶鳴きつづ
 ける。空と水の薔薇色が少し褪ふ。忽ち晃々と眼ばゆき光

利根秋曉

某年秋十一月初旬，我留宿於利根川左岸一個名叫息棲的地方。此處為利根川幹流與北利根北浦下游的匯合之處，因而河面開闊，距對岸的小見川約有一里。客舍緊臨水邊，夜半醒來，枕邊不時傳來嘎吱嘎吱的搖櫓聲。

黎明起身，旅館的人仍在睡夢中。遂悄悄打開房門，來到河邊，此處堆積着一些木柴。我拂去上面的霜花，安坐下來。四周微暗，天空與河面還是一片茫茫的鉛灰色。不一會兒，身後昏暗的窩棚中傳出了雄雞破曉的叫聲。不久，對岸的小見川方向也傳來隱隱的雞鳴聲。隔着大河，雞鳴聲遙相呼應，着實有趣。先賢查爾西亞和先哲康科德，就如這般隔着大西洋相互應和的吧！在我看來，黎明彷彿是從兩岸的雞鳴聲中湧上了河面。不一會兒，小見川方向的天空出現一片茫茫的薔薇色。放眼望去，河面上飄蕩着淡淡的薄紅色，水霧茫茫。然而轉瞬之間，夜色流向下游，曙光佈滿四圍。雞鳴不止。水天之間的薔薇色漸漸消褪。忽而，一道晃眼的光芒流過水面。回頭望去，杲杲旭日正從息棲神宮的樹梢升起。此時，一隻烏鴉飛離枝頭，背負着朝陽，宛若宣告黎明到臨的神使一般，展翅搏擊着清晨凜冽的空氣，朝小見川方

みず なが なが なが なが なが なが なが なが なが
 が水に流れる。ふり 顧り 見れば、朝日は杲々として今息栖の宮
 もり こずえ はな そ こずえはな からすいち わ あさ ひ
 の森の 梢 を離れたのである。其の 梢 離るゝ 鳥 一羽、朝日を
 お さ あかつき つ わ しん し ごと りん あした
 負うて、宛ながら 暁 を告げ渡たる神使の如く、凜とした 朝
 たい き は う お み がわ ほう と ゆ お み がわ ま
 の大気に羽搏つて、小見川の方へ飛んで行く。小見川は未だ
 あお あさぎり ねむ い
 碧々とした朝霧に眠つて居る。

む かう ま ねむ い こちら むら も う うしろ こ
 對岸は未だ眠つて居るが、此方の村は最早さめた。背後の茅
 や けむり たちのぼ いまさく で あ ひる あしあと しも つけ くわつ
 舎から煙 が立上る。今柵を出た家鴨は足跡を霜に印て、刮々
 よ あさ ひ くだ みず と こ こわやなぎ えだ ことり
 呼びながら、朝日を碎いて水に飛び込む。川 楊 の枝に小鳥が
 さ いま お き むらびと しろ いき ふ かわ お
 囀へづる。今起きて来た村人が、白い息を吹き／＼川に下り
 かわみず むす くちこそ かお あら はる つくば ほう
 て、河水を掬んで 嗽 ぎ、顔を洗ひ、それから遙かに筑波の方
 む て あわ おが お
 へ向いて、掌を合して拜むで居る。

あゝ 實に好い拜殿、と自分は思った。

向飛去。而小見川依舊沉睡在一片碧色的晨霧之中。

對岸尚在沉睡，而河這邊的村莊已經蘇醒。身後的茅舍升起裊裊炊煙。家鴨離開柵欄，在霜地上印下足跡，嘎嘎地叫着，踏碎晨曦，撲向水面。河畔的楊柳枝上，鳥聲婉轉。陸續起床的村民們呵着白氣來到河邊，掬起河水，漱口洗臉，然後朝着築波方向遠遠地合掌禮拜。

啊，我想，此處可真是一個極好的禮拜堂啊！

じょうしゅう やま
上州の山

はた おと せい し けむり くわ うみ そのうえ そび あか ぎ はる な みょう ぎ
機^{はた}の音^{おと}、製^{せい}絲^しの煙^{けむり}、桑^{くわ}の海^{うみ}、其^{その}上^{うえ}に聳^{そび}ゆる赤^{あか}城^ぎ榛^{はる}名^な 妙^{みょう}義^ぎ
う すい とお あさ ま か い ち ぶ れん ざん にっこう あし お れん ざん えち ご さかい
碓^う氷^{すい}、遠^とくて浅^あ間^さ甲^か斐^い秩^ち父^ぶの連^{れん}山^{ざん}、日^{にっ}光^{こう}足^{あし}尾^おの連^{れん}山^{ざん}、越^{えち}後^ご 境^{さかい}
れん ざん ある い き しょう ある い ゆう い ね ち かしら てん どう どう
の連^{れん}山^{ざん}、或^{ある}は奇^き 峭^{しょう}、或^{ある}は雄^{ゆう} 偉^い、根^ねは地^ちに、頭^{かしら}は天^{てん}に、堂^{どう}々^{どう}
として立^たつて居^いる。果^{はて}しな^い桑^{くわ}原^{ばら}の道^{みち}に魔^あき果^はてゝ、其^{それ}とな
め あ これ ら やま やま つね たい ぜん かしら もた
く眼^めを上^あげると、此^{これ}等^らの山^{やま}々^{やま}が常^{つね}に泰^{たい}然^{ぜん}として頭^{かしら}を擡^{もた}げて
居^いる。

にち じょう せい かつ あく せく たち まじ しか こころ てい ぜん む きゅう
日^{にち} 常^{じょう} 生^{せい} 活^{かつ}の醜^{あく} 醜^{せく}に立^{たち} 雑^{まじ}つて、然^{しか}も心^{こころ}は挺^{てい}然^{ぜん}として無^む 窮^{きゅう}の
てん むか い だい じん ぶつ まこと か ごと
天^{てん}に向^{むか}ふ偉^い 大^{だい}の人物^{じんぶつ}は、實^{まこと}に斯^かくの如^{ごと}くあるであらう。

じ ぶん じょうしゅう ゆ ごと やま か ささや よう おぼ
自^じ分^{ぶん}は上^{じょう} 州^{しゅう}に行^ゆく毎^{ごと}に、山^{やま}が斯^かく囁^{ささや}く様^{よう}に覺^{おぼ}ゆるのである。

上州的山

織機的聲音、縑絲的煙霧、桑樹的海洋。其上空高高聳立着赤城、榛名、妙義、碓冰群峰，遠處是淺間、甲斐、秩父群山，日光、足尾二峰，以及越後一帶的連綿群山。或奇峭，或雄偉，扎根大地，頭頂蒼穹，堂堂雄立。在一望無垠的桑原之道上走膩了，抬眼望去，這些大山總是泰然地昂首屹立着。

那些置身於日常生活的瑣碎忙碌中，依舊心胸超然仰視長空的偉人們，不也正是如此嗎？

每每來到上州，總覺得群山在向我如此喃喃低語。

くうざんりゅうすい

空山流水

あるとし あき じゅうがつ すえ じ ぶん しおばらほうきがわ しりゅう
 或年の秋、十月の末であつた、自分は鹽原 簗 川の支 流
 かゝまたがわ ほとり いし こし い ぜん や こがらし はげ ふ
 鹿股川の 畔の石に腰かけて居た。前夜 風 が烈しく吹いて、
 も み じ たいてい ち かわどこ ほと まっ か い
 紅葉は大抵散つてしまつて、川床は殆んど眞紅になつて居た。
 みぎ ひだり み あ ほど みね ほそなが あおぞら かぎ そら かわ
 右も 左も見上ぐる程の峰が細長く 青空を限つて、空にも川が
 なが い おも あきまつ こと みず や か か
 流れて居るかと思はれた。秋末の事で、水は痩せ、涸れに、涸
 れて、いわゆるぜんせき かわどこ ま なか なが ゆ かわどこ みね みね
 谷間をくねつて、先下りになつて居るから、遠くまで 流 の末
 たに ま さきさが お とお ながれ すえ
 が見える。 恰 川の末に一高峰が立ち 塞つて、遠くから見る
 かわ そのみね す こ よう おも またやま こ こ
 と川は其峰に吸ひ込まれるかの様に思はれ、又山が、「此處に
 い さと い なに い い みず ながれ
 居なさい、里に出で何になる、居なさい、居なさい」と水の 流
 いだ と よう おも
 を抱き止める様にも思はれる。

しか みず そこ いし あら も み じ しがらみ もぐ うた なが
 併し水は底の石を流ひ、紅葉の 柵 を潜つて、歌ひながら 流
 ゆ いし こし き い そのおと まつかぜ ひと な
 れ行く。石に腰かけて、聞いて居ると、其音！松風、人無くし
 な こと おと なに たと よ み いしうえ ざ
 て鳴る琴の音、何に譬へて宜からう？身は石上に坐しながら、
 こころ りゅうすい ゆく え お とお とお とお かす
 心は 流 水 の行末を追つて、遠く、遠く、遠く——あゝまだ灰
 きこ
 かに聞える。

いま はん や ゆめ さ こころ す おりおり ど こ とお とお この
 今でも半夜夢醒めて、心 澄む折々は、何處かに遠く遠く此
 おと きこ
 音が聞えるのである。

空山流水

某年秋，十月末，我靜坐於鹽原箒川的支流鹿股川河畔的石頭上。昨夜，秋風凜冽，吹落了大片紅葉，河床上幾乎是一片豔紅色。抬眼望向左右兩側，高聳的山峰夾着一條細長的青空，讓人不禁覺得天空上也有河流經過呢！時值深秋，河水消瘦而乾涸，可以說是在佈滿石頭的河床上流淌着。河床蜿蜒於峰巒山谷之間，順勢而下，可望見流水的盡頭。河流的盡頭恰有一座高峰矗立，遠遠望去，彷彿河水都被山峰吞吸進去一般，又好像山峰抱緊了流水，說着：「就留在這兒吧！流到村莊又會如何呢？留下吧！留下吧！」

然而，河水依舊從河底的石頭上流過，穿過鋪滿紅葉的柵欄，唱着歌離去。坐在石頭上，側耳傾聽，就是那聲音！是松風，是無人彈奏而自鳴的琴音，用甚麼比喻才好呢？身體雖位於石上，心卻追隨流水而去，遠去了，遠去了，遠去了——啊，還隱約可聞。

至今，每每夜半夢醒，心神澄淨之時，彷彿仍能聽到這聲音遠遠地、遠遠地從哪裏傳來。

おおうみ しゅつじつ
大海の出口

まくら うご とうせい ゆめ やぶ た と ひら と き めい
枕を撼かす濤聲に夢を破られ、起つて戸を開きぬ。時は明
じ に じゅうきゅうねんじゅういちがつよっ か そうぎょう ばしょ ちょう し すいめいろう
治二十九年十一月四日の早暁、場所は銚子の水明樓にし
ろう か ただ だいとうよう
て、樓下は直ちに大東洋なり。

ごぜん よ じ す かいじょうな お ぐ なみ おと
午前四時過ぎにもやあらむ、海上猶ほの闇らく、波の音のみ
たか ひがし そら のぞ すいへいせん そ くすぶ かばいろ よこ
高し。東の空を望めば、水平線に沿うて燦りたる樺色①の横た
ふあり、上りては濃き李藍色の空となり、こゝに一痕の弦月あ
りて、黄金の弓を挂く。光さやかにして、宛ながら東瀛を鎮す
るに似たり。左手に黒くさし出でたるは犬吠岬なり。岬端の燈
臺には、廻轉燈ありて、陸より海にかけ連りに白光の環を畫きぬ。

しばらく ほど ぎょうふうれい い あおぐろ うなばら はら きたり よる
暫くする程に、暁風冷々として青黒き海原を掃ひ来り、夜
ころも ひがし し だい は あおじろ あかつき なみ ふ こ
の衣は東より次第に剥げて、蒼白き「暁」の波を踏みて此
なた ちかよ さま し てん べ いそ くろ なみしろ うち
方へと近寄る状も指點す可く、磯の黒きに濤白く打かゝるさま
も 漸く 明 になり来りぬ。眼を上ぐれば、黄金の弓と見し月
い つ しろがね ゆみ くすぶ み ひがし そら し だい す
も何時か白銀の弓とかはり、燦りて見えし東の空も次第に澄
みたる黄色を帯びぬ。森森たる海原に立つ波の、腹は黒うして
せ あおじろ よる ゆめ なおうみ うえ ひがし そらすで まふた
背は蒼白く、夜の夢は猶海の上にさまよへど、東の空已に睫
ひら たいへいよう よる いま あ
を開きて、太平洋の夜は今明けんとするなり。

① 樺色：赤みを帯びた黄色。

大海的日出

濤聲震耳，打破枕上睡夢，我起身拉開了房門。時值明治二十九年十一月四日的凌晨，地點是銚子的水明樓，樓下正是太平洋。

清晨四時剛過，海面微暗，只有濤聲一浪高過一浪。眺望東方的天空，沿着海平線是一片霧蒙蒙的赤褐色，而在其上方深藍色的天空中，掛着一彎弦月，宛若金色的弓。月光盈盈，彷彿鎮守東瀛一般。左手邊突出的一塊黑黢黢的是犬吠岬。岬端的燈塔上有旋轉燈，燈光不斷在陸地和大海之間勾畫出白色的光環。

稍過一會兒，你會看到寒冷的晨風掠過藍黑色的海面，黑夜自東方逐漸消褪，蒼白的晨曉踏浪而來，不斷地靠近、靠近。波浪打在黑色石灘上所濺起的白色浪花也越來越清晰。抬眼仰望，金色的弦月不知何時已變成銀白色的彎弓，東方霧蒙蒙的天空也逐漸透出澄澈的金光。浩渺海面上翻騰的波浪，裏面仍是黑色，背部卻已蒼白。夜之夢仍在海面上遊蕩，東方的天空卻已睜開了雙眼，太平洋的夜色就要結束了。

已すでにして曙光しょうこうは花はなの發ひらくが如ごとく圈波けんぱの廣ひろまる如ごとく空そらに水みずに廣ひろ
 がり行いきて、水みずいよ／＼白しろく、東ひがしの空そらます／＼黄きばみ、弦月げんげつ
 も燈臺とうだいもわれと薄うすれ行ゆきて、果はてはありとも見みえずなりぬ。此この
 時日ときひの使つかいとも覺かくしき渡わたり鳥どりの列いちれつ鳴なきつれて海原うなばらを掠かすめて過す
 ぐれば、大瀛たいえいの波なみと云いふ波なみは 盡ことごとく爪つま立ちて東ひがしの方かたを顧かえりみ、
 一いっしゅ種ま待つあるのさゞめき — 聲こゑなきの聲こゑ四方よもに満みつ。

五分ごふん過ぎ — 十分じゅうふん過ぎぬ。東ひがしの空そら見みる／＼金光こんこう射さし来きたり、
 忽こつぜん然しんとして猩しょう紅こうの一いつてん點かいたん海端うに浮いみ出すでぬ。驚破すはや、日出ひのいでぬ、
 と思おもふ間まもなし。息いきをもつかせず、瞬まばたく間まもなく、海神わたつみが手て
 もて撃ささぐるまゝに、水みずを出いづる紅點こうてんは金線きんせんとなり、黄金こがねの櫛くし
 となり、金蹄きんていとなり、一いちよう搖なして名な残ごりなく水みずを離はなれつ。水みずを離はなれ
 るゝ其時そのとき遅おそく、萬斛ばんこくの金かねたらたらと昇のぼる日ひより滴したたりて、萬里ばんり
 一瞬いっしゆん、此方こなたを指さして長蛇ちようだの如ごとく大洋たいようを走はしると思おもへば、眼下がんかの
 磯いそに忽こつぜん焉えんとして二丈にじようばかり黄金こがねの雪ゆきを飛とばしぬ。

就在此時，曙光宛如花開一般在天空中、在海水中蕩開一圈漣漪，海水愈發的白，東方的天空愈發的金黃，弦月和燈塔逐漸模糊，再也望不到模樣。此時，一列渡鳥宛若太陽的使者，鳴叫着掠過海面，萬頃波濤皆駐足翹首望向東方，發出一種等候已久的喧鬧——那無音之聲佈滿四方。

五分鐘過去了——十分鐘過去了。眼看着東方的天空散發出金光，忽然一點猩紅從大海的盡頭浮現。哎呀，旭日出來了，連這樣思考的時間都沒有。就在屏息轉瞬間，海神之手就高擎着一點紅光冒出水面，先是化為一道道金色的光線，再似黃金的梳子、金色的馬蹄，最後身子一晃瀟灑地離開水面。就在離開水面的一剎那，好像有萬斛黃金從冉冉旭日中灑落，一瞬間大洋萬里，宛如長蛇飛騰，直奔而來。眼前的石灘上突然飛濺起兩丈高的金色雪浪。

さがみなだ らくじつ
相摸灘の落日

しゅうとうかぜまった な てん いっぺん くも ゆうべ た い ず
秋 冬風 全 く 風 ぎ、天 に 一 片 の 雲 な き 夕、立 つて、伊 豆 の
やま お ひ のぞ よ かか へい わ おお べ おも
山 に 落 つる 日 を 望 むに、世 に 斯 る 平 和 の ま た 多 か る 可 し と も 思
は れ ず。

ひ やま お それまった しず おわ さんぶんとき
日 の 山 に 落 ち かゝ り て よ り、其 全 く 沈 み 終 る ま で 三 分 時 を
よう
要 す。

はじ ひ にし かたぶ ふ じ はじ そう ず れんざん けぶり ごと うす
初 め 日 の 西 に 傾 く や、富 士 を 初 め 相 豆 の 連 山、煙 の 如 く 薄
ひ いわゆるはくじつ はっこうらんらん まぶ やま め ほそ
し。日 は 所 謂 白 日、白 光 爛 々 と し て 眩 し き に、山 も 眼 を 細 う せ
る に や。

ひ さら かたぶ ふ じ はじ そう ず れんざん し だい むらさき
日 更 に 傾 く や、富 士 を 初 め 相 豆 の 連 山 次 第 に 紫 に な る な り。
ひ さら かたぶ ふ じ はじ そう ず れんざん むらさき はだ きんえん
日 更 に 傾 く や、富 士 を 初 め 相 豆 の 連 山 紫 の 肌 に 金 煙 を
お
帯 ぶ。

このときはま た のぞ らくじつ み なが われあしもと いた かい
此 時 濱 に 立 つて 望 め ば、落 日 海 に 流 れ て、吾 足 下 に 到 り、海
じょう ふね みなきんこう はな ず し はまいたい やま い すな い
上 の 舟 は 皆 金 光 を 放 ち、逗 子 の 濱 一 帯、山 と 云 は ず、砂 と 云
は ず、い え い まつ い ひ と い まろ が り た る い け す
は ず、家 と 云 は ず、松 と 云 は ず、人 と 云 は ず、轉 が り た る 生 實
の 籠 も、落 ち 散 り た る 藁 屑 も、赫 焉 と し て 燃 え ざ る は な し。

かか なぎ ゆうべ らくじつ み み あたか たいせい りんじゅう じ
斯 る 風 の 夕 に、落 日 を 見 る の 身 は、恰 も 大 聖 の 臨 終 に 侍
する の 感 あ り。莊 嚴 の 極、平 和 の 至、凡 夫 も 靈 光 に 包 ま れ て、
にく と たまひと たんぜん イタルニデー ひん たたず おぼ
肉 融 け、靈 獨 り 端 然 と し て 永 遠 の 濱 に 彳 亍 を 覺 ゆ。